
こんな魔王と勇者ってどうですか？

ケセランパセラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな魔王と勇者ってどうですか？

【Nコード】

N2699X

【作者名】

ケセラランパセラ

【あらすじ】

俺、佐藤勇治さとうゆうじは平和な田舎町で暮らしていた平凡な高校生だった。けどあることがきっかけで異世界に飛ばされてしまいいきなり勇者になってしまった。そこで魔王退治を依頼される。しかたなくその依頼を受けて魔王退治に向かうがその魔王がかなりの変わり者だったんです。

俺、異世界に來ちゃいました（前書き）

はじめまして。ケセランパセランと申します。ファンタジーが書いてみたくて書いてみましたが！絶対グダグダになってきますのでそれともいいよという方はよろしく願います。！

俺、異世界に来ちゃいました

ここは日本のとある田舎町。あるものは見渡す限りの畑と田んぼ。町の周りも山に囲まれており自然があふれているとても空気がおいしい場所だ。これだけ聞けばとてもいい場所のように思うだろう。

しかしさつきも言ったとおりここにあるのは見渡す限りの畑と田んぼそして山。そんな環境に俺は最近不満を感じるようになっていた。「本当なんにもねえよなこっつて」

そんな独り言を言いながら俺「佐藤 勇治」（さとう ゆうじ）は高校の図書室でただいま居残り作業中。

「はあゝあ、ついてねえよな」

よりにもよって一番怖いと評判の教師の授業で居眠りしてしまうなんて。おかげで図書室の書庫の整理なんてやりたくもない仕事を任されてしまった。

「にしてもいったいいつになったら終わるんだこれ」

俺の目の前には気の遠くなる程の本の山。その中にはいつの時代の本だよと思うようなものもいくつか混ざっている。っていうかうちの高校の図書室ってこんなに本があつたのか。普段来たことがないから全然知らなかった。

けれどもここそんなに利用者がいないのか先ほどから人っ子一人来ない。本読みに来る人がいないのにこれだけ本あってもあんまり意味がない気がするが。

そんなこと考えつつしばらく作業していると

「ん？・・・なんだこの本？」

たくさんある本の山の中でそれはひときわ怪しい異臭を放っていた。他の本と比べて見た目がかなりごつくこの本で思いつき殴られれば死ぬんじゃないかと思うほど分厚い。表紙にはどこの国の文字が分からないがひたすら一面になにか書いてある。なんていうかよくファンタジー映画なんかにてくる冒険の書みたいな感じの本だっ

た。

「うわぁー何かこれハリー。ッターとかにでてきそうだな」

ちよつと興味を持ったので読んでみようと思い表紙をめくろうとしてみたが

「うおっ！なんだこれ重っ！！」

すごく重いぞこの表紙。表紙なのにこの重さって読ませる気ないだろ。

「ぐぬぬぬぬぬ・・・こんぬおおおおおおお！！」

表紙をめくろうと格闘すること数分。なんとかめくすることに成功したがかなり疲れた。

「ぜえはあぜえはあ・・・い、一体何の本なんだ？」

息をきらしながら本を見てみると

「なんだこれ？なんて書いてあるんだ？」

ページ一面にまたもやどこの国のものか分からない文字がびっしり書かれている。それとどこかで見たことがあるようなこれは魔法陣っていうのか？が書かれていた。

「これ何なんだろう？」

俺はその魔法陣？のようなものに手を触れてみた。その時だった

「あれ？なんか急に眠くなってきた・・・」

頭がクラクラする。なんだか体も軽くなってきた気がする。

「あゝ・・・どうなっ・・・てん・・・zzzzz」

俺はそのまま本の上に突っ伏すような感じで倒れこんだ。なにやら本が一瞬光っていたような気もするがそんなこと考える前に俺の意識は完全にブラックアウトしていった。

それからどれくらいたったのだろうか。

「・・・さま。」

ん？なんだ？なんだか体がゆさゆさと揺さぶられているような感覚が急に襲ってきた。

「・・・者様」

それに誰かの声も聞こえてきた。誰だ？せつかく人が気持ちよく寝

てたのに。

「う・・・ん」

闇の中に消えていった意識が次第に戻ってきた。俺はゆっくりと目を開けて上半身だけを起き上がらせる。

あゝまだ起きたばかりなので頭がボクボクとする。しばらくその体勢のまま下を向いていた。すると次第に頭がスツキリしてきた。

「どれくらい寝ちまつてたんだる俺」

よつと立ち上がって周りを見回す。そこで俺は違和感を感じた。

「あれ？」

図書室ってこんなに広かったわけ？天井とか見上げるくらい高かったわけ？こんなに綺麗な絨毯とか敷いてあったわけ？

「寝ぼけてるのか？」

そう思っただけ目をゴシゴシとこする。ついでにほつぺたもつねってみた。痛い。どうやら夢ではないらしい。意識もはっきりしているし見間違えることはないだろう。

「ど、どうなってるんだ一体」

何が起きたのかさっぱり分からない。ここはどこだ？そんなこと考えてたら

「勇者様！！お目覚めになりましたか！」

「ぬお！！」

急に後ろから声をかけられた。振り返るとそこにはマンガとかでよく見るようなお姫様みたいなカツコウをした女の子が立っていた。

「も、申し訳ありません。驚かすつもりはなかったのですが」

「あ、あゝいえ大丈夫です。はい。」

えゝと、誰だこの子。

「けれど、本当に勇者様が来てくださるとは。やはりこの書に書いてあることは本当だったのをごいいますね」

ん？ちよつと待て。この女の子今なんて言った。確か勇者？とか言っただけだったか。

「あ、あのゝすいません。さっきから言ってるその勇者ってなんで

すか？あとここはどこなんでしょうか？」

「ここですか？ここはセシリエル王国でございます。そして私がこの国を救ってくださいる勇者様をお呼び出しする儀式を行ったところあなた様がこの国に呼び出されたのです。つまりあなたがこの国の救世主である勇者様ということなのです！！」

・・・なるほどつまり俺はこのなんとら王国を救う勇者様としての国に呼び出されたというわけか。

あるあ（ryねーーーーーよ！！！！

「はあああああああああああああああああああああああ！！

！！！！」

こうして俺の勇者様としての生活が始まったのである。

「え！？始まっちゃうの！！ちよつと~~~~~~~~！！！！」

一般人が魔王を倒すとか無理だと思うんだ（前書き）

お、お久しぶりで・・・ぐはっっ!!

というわけで久しぶりに更新です。よろしくおねがいし・・・バタッ。

一般人が魔王を倒すとか無理だと思うんだ

えーと、待ってくれ。もう何から突っ込んだらいいのやら。図書室で書庫の整理をしていた俺がいきなりわけのわからない場所に来て目が覚めたら見知らぬ女の子に‘勇者様！’なんて呼ばれたりして一体どうなってるんだ。

「ちょ、ちよつと待って、待ってください。何なんですか救世主？この国を救う？何のことですか！？」

「ですからあなた様はこの書物によつてこの国に召喚された勇者でありこの国の救世主なのです！」

あゝだめだ全然話にならん。どうするかなあ……。ふと彼女の手元を見てみると俺が書庫の整理をしているときに見つけたあの怪しい本を持っていた。これがさつきから言ってる俺をここに呼び出した？書物ってやつか。あれ？でもその本かなり分厚くて重いはずなのだけこの子は何でこんなに軽々と持つてるんだ？

そんなことをしていると

「勇者様、とにかくすぐに魔王退治の準備をいたしましょう」

「へ？魔王・何だつて？」魔王？何それおいしいの？

「さあこちらです！」

そう言っていきなり手を握られた。女の子に手を握られたの生まれて始めてかも。

「あ、あのちよつと待つ・ぬああああああああああああああ
！！」

え！？何この子すごい力なんですけど！！やばいよ俺の体が宙に浮いちゃってるもん！！

「タンマ！！タンマーーーー！！きいやああああああああ
あああああ！！」

しばらくの間長い廊下をこの状態で過ごした俺は目的地につく頃には口から魂が出たような状態になっていた。

「さあ着きましたよ勇者様」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あれ？勇者様？きゃああああ！！勇者様——！！」
しばらくして

「・・・・・・・・・・はっ！！！」

俺は何とか意識を取り戻した。

「勇者様！よかったですー！。ごめんなさい私慌ててて・・本当に
ごめんなさい・・」

女の子は泣きそうになりながらぺこぺこしてきた。

「い、いやまあ大丈夫だから。そんな泣きそうな顔しないで、ね？」
実際全然大丈夫じゃなかったけど。生まれて初めて本気で死ぬか
と思った・・

「ぐすつ・・本当にごめんなさい。勇者様はお優しいんですね」

「い、いやあそんな優しいなんてことは・・」

またもや生まれて初めて女の子に優しいなんて言われてしまった。
正面から言われるとすんげえ恥ずかしいな。

と、ここで俺はあることに気づいた。

「そっぴや君名前は何て言うの？」

「あ！も、申し訳ございません！私の名前はカトレア・ヒューブリ
ックと申します」

カトレア・ヒューブリック？何かすごい名前だな。やっぱりここの日
本じゃないのかなあ。

「カトレア・ヒューブリックさんね。俺の名前は佐藤勇治っていい
ます」

とりあえず俺も軽い自己紹介をする。

「佐藤勇治様・・それが勇者様の本名なのですね。しっかりと覚えて
おきます！」

「あ、ああありがとう。それよりもカトレアさんいたいこことて・
」

俺の目の前には所々に綺麗な装飾が施されている金色の扉があった。

こついうのよく分からない俺でも見入ってしまうほどの壮大さだった。

「ここにはわが国が魔王を倒すために開発した様々な武器が保管してあります。今から勇者様には魔王討伐のための武器選びをしていただきます。」

まただ。さつきから魔王だの討伐だのすごい話をしているが俺には何のことだかさっぱり分からない。

「ま、待つて俺が魔王を討伐？それってその魔王とやらと戦えってことだよな？」

「はい、そのとうりでございます」

「いや、あの俺ケンカもしたことないし力だつてそんなにないから戦うとかそういうのは無理だと思うんだよね」

「いえ、勇者様ならきつと大丈夫です！この書にも召喚された勇者が必ずやわが国を救ってくれると書いてありますしそれにこの武器庫の中にある武器を使って挑めば問題はないはずですから！」

いや色々と問題だらけだよ！！何なのその自信は！本人が無理だつて言ってるのに！

「とにかく見ていただければ大丈夫だと思えるはずですから！行きましょう勇者様」

とりあえずここで魔王討伐の武器とやらを選ぶことになったのだが

「選ぶだけ無駄だと思うけどなあ・・・」

こつして俺の武器選びが始まった。

初期装備って意外と大事（前書き）

ファンタジーって書くの難しいですねえ・・・

初期装備って意外と大事

カトレアさんに案内されて武器庫の中に入ってみる。するとそこには「な、なんじゃこりや・・・」

部屋の中にはおびただしい数の剣やら鎧やら俺がいた田舎町ではまず見ないであろうものがところせましと飾られていた。入り口から眺めただけでは奥のほうに何があるか分からないほど部屋もかなり広い。

「すげえ〜どんだけ武器の種類あるんだよ。ってかこの中から選ぶの？」

「はい。魔王討伐のためにはこれくらいしなないとけませんから」
「気合入ってんなー。ここまでしないとイケないくらいすごい魔王って一体どんなんだろう？」

「・・・・・・」

あ、だめだ想像しただけで俺の中の危険を知らせるアラームが大音量で鳴り響いてる。

「さあ勇者様好きな武器を選んでください」

「は、はあ〜」

好きな武器を選んでくださいと言われてもどうすればいいんだよ。こんなの使ったことも無いのに。とりあえず部屋全体を見るために奥の方へと進んでいく。途中どうやって使うかも分からないような武器がたくさんあったのでカトレアさんに説明をもらったがどれもこれも俺が使いこなせそうなものではなかった。

というか本音を言えば武器なんか使いたくなかった。俺は平和主義派なので魔王と戦うなんてもってのほかだし。話し合いとかで何とかならんもんなあー。

そんなこと考えながらしばらく部屋の中を見てまわったがどれもこれもしっくりくるものが無かった。

「勇者様お気に召したものはありましたか？」

「うーん・・もう少し見てまわってもいいかな？」

「ええ好きだけ見てください。あ、ちなみに私のおすすめはこの龍殺しの剣かこちらの10tハンマーでございますわ」

「ぜつつつつつつつたいたい嫌だ！！！！なにそれ！どちらもありえないほどの禍々しいオーラがにじみ出てるんですけど！！」

「遠慮しとくよ・・ははは・・」

「まずいぞこれは早くいい感じの武器を見つけないととんでもないやつを使う羽目になるかもしれん。それだけは絶対に避けなければ。そしてまたしばらく部屋をきよろししていると」

「あれ？なんだあの箱？」

「さつきは気づかなかったけど他の武器の陰に隠れるようにしてポツンと少し大きめの箱が置いてあった。」

「カトレアさんあの箱はなんですか？」

「ああ、あれは武器開発をしている時に試作品として作ったのが出来がよくないからという理由で駄目になったものを入れているものですね」

「試作品か。一体どんなんだろう？とりあえず箱を開けてみる。そこで俺は思わず自分の目を疑った。」

「こ、これはまさか！！！！」

「そこにあつたのは叩くと可愛い音のする真っ赤な格好をしたあいつだった。そうそれは」

「ピコピコハンマー！！！！」

「つてなんでだよ！！！！なぜピコピコハンマーがここに！やる気あるのか武器開発者！」

「そのハンマーは叩いてもやわらかいためあまり攻撃の威力がなくて叩く時にピコツという音がするだけの失敗作ですわ」

「まあ魔王相手にピコピコハンマーは確かにないよなあ。むしろ魔王に馬鹿にしているのかと思われて怒りをかいそうだし。これは無理があるか・・」

「そう思っていたがここで俺はふとある名案を思いついた。」

「そうか。そうだ！この手があつたか！！」

これならば平和的解決ができるかもしれない。うん、いける！！俺は決心した。

「カトレアさん俺この武器にします！この武器で魔王を倒して見せます！！」

「え！こ、これでよろしいのですか？ですがこれは失敗作ですよ？」

「大丈夫です俺に任せてください！絶対に大丈夫ですから！だからおねがいします！！」

俺がそう言つとカトレアさんは少し何か考えはじめた。

頼む、頼むから龍殺しとか10tとかはやめてくれー！ー！。

そんな俺の願いが届いたのかカトレアさんはしばらく考え込んだ後「わかりました。勇者様がそこまでおっしゃるのならお任せいたしますわ」

よっしやあああああああああー！！！！！！

「ありがとうございます！！」

こうして俺は魔王討伐のためにピコピコハンマーを装備していくことになった。

うん、まあなんとかなるだろう。……たぶん。

魔王城って意外と分かりやすい(前書き)

魔王ってどうやって生まれるんですかね?というどうでもいい疑問が浮かびました。本当にどうでもいいですね。
相変わらずグダグダですがよろしく願います。

魔王城って意外と分かりやすい

「それでは勇者様とりあえず武器も決まったわけですしさっそく魔王討伐に向かっていただけですか？」

「え！？もうですか！っていうかちよつと待って、その魔王っていうのはなんなの？なんでそんなことになってるの？」

「それは・・・話せば長くなるのですが・・・」

カトレアさんが急に真面目な顔になりなにやら深刻そうなオーラを出している。

「じつは、ここ最近魔族による事件や暴動が頻繁に行われるようになって近隣の国や村が大きな被害をこうむっているのです。中にはもうすでに壊滅状態にまで追い込まれている場所もあるようでもはやこれは見過ごすわけにはいかないということのでわが国は魔王討伐のために動き出したのです」

「壊滅状態って・・・そんなひどいことになってるのかよ」

確かにそれは見過ごせないよな。

「ん？でも、ここ最近ってことは前まではそんなことなかったってこと？」

「はい。数年前まではこういった大きな事件や被害も無かったのですが急に魔族の活動が活発になってきて今ではこの有様です」

急に活発にか・・・どうしてだろう？何か理由があるはずなのだろうけど。

「うーん、さっぱりわからん」

「とにかく今この現状をどうにかしなければいずれわが国も何らかの被害をこうむる筈。そうなる前に元凶をどうにかしなければいけないのです！！」

「な、なるほど現状はわかった。けれどもさ俺に魔王討伐とかは無理だと思っただよね。ほら俺、体格も平凡だし力もそんなに無いしさ」

「あ~~~~~」

「はは・・こんなわけの分からないような場所で死ぬなんて思いもしなかったよ。」

「とにかく善は急げです。勇者様行きますよ!!」

「あ~~~~~え?」

「カトレアさんが俺の手を握っていた。あれ?何かこの光景すっごいデジャブなんですけど。」

「カトレアさんちよつと待つああああああああああああああああああ!!」

俺が静止する前にカトレアさんは走りだした。

「もついやだああああああああ!!」

しばらくして・・・

「さあ、勇者様着きましたよ」

「うおえええええき、気持ち悪い・・」

ふらふらになりながらも何とか意識を保ちつつ正面に聳え立つ魔王城を見上げた。近くで見て俺はさらに絶望した。

「嘘だろ・・」

でかい、でかすぎる。こんな建物今まで見たこと無いぞ。っていうか何だか城の中から変な声?なのか何なのかは分からないが不気味な音が響いていた。

「それでは勇者様、私はここまでしか近づくことができません。これから先は勇者様一人で行っていただくことになります」

「え!?ちよ、ちよつと待って!!俺一人で行くの!?もつと仲間の人とかいないの!?!」

「それが、今わが国の兵士たちは壊滅状態になってしまった国や村の救援作業のために出払ってしまっているのです」

「だ、だったらその人たちが帰ってきてからでもいいんじゃないの?そのほうが魔王討伐に成功する確率も上がるんじゃないの?」

嫌だ、一人は絶対に嫌だ!!

「ですが勇者様彼らが帰ってくるのは当分先の話になってしまふの

です。それにわが城の調査隊の調べによると今魔王城の魔力が急激に弱まっているとのことなのです。ですからチャンスは今しかないのです！！」

も何で魔王城そんなにタイミングいいんだよ！！誰かの陰謀か？
陰謀なのか！？

「勇者様、お願いします！あなたしかいないのです！！」

カトレアさんが半泣きになりながら俺に頭を下げてひたすらお願いしてきた。

「~~~~~」

女の子が半泣き状態になりながらこんなに必死にお願いしているのにウジウジしている自分がとても情けなかった。

ここで断つたら本当の意味でヘタレで最低な男になってしまう。だけれどこんな場所に一人は嫌だ。

[illegible]

「あああ！！！！」

ここまできたらもうしょうがない！！男をみせる俺！！

「わかった！！わかったよ！こうなったらもうやけだ！！魔王でも何でもかかってこい！！」

「ゆ、勇者様！！」

カトレアさんの表情がパーツと明るくなった。

俺は一度決めた決心がまたぶれる前に魔王城の正面扉に向かって歩き出した。

「じゃあ、行ってきます!!」

カトレアさんに大きな声でそう告げた後、俺は勢いよく扉を開け放った。

中に入ってみるとなんともしえないひんやりとした空気と沈むような重い空気が漂っていた。

• • • • •

どうしよう、もう逃げ出したい。

とりあえず、少しずつ奥え奥へと進んでいく。進んでいくたびに先

ほどよりも淀んだ空気と時々聞こえる何かの鳴き声に俺のメンタルポイントがゴリゴリ削られていった。

しばらくして一つの部屋にたどり着いた。部屋の扉には死神を彷彿とさせるようなデザインの装飾が施されていた。

「開けたくねえ・・開けたくねえよ・・」

泣き出しそうになりながらも恐る恐る扉に手をかける。その時

「あのゝ私の部屋に何か御用ですか？」

「うびゃあああああああああああああ!!」

突然後ろから声をかけられた。俺は叫び声を上げながら慌てて後ろを振り返った。

すると、そこにいたのは・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2699x/>

こんな魔王と勇者ってどうですか？

2011年11月21日13時40分発行